



21年度の特技懇活動の総括

——代表委員の独り言——

特許庁技術懇話会 平成21年度代表委員 渡辺 仁

はじめに

特技懇の代表委員に就任してから一年が経ちます。これまで、特技懇誌に原稿を書く機会を頂いたことはありませんでしたが、特技懇の委員や幹事を務めたことはありませんでした。そして、最近では特技懇の活動全般に対して積極的だったともいえませんでした。つまり、特技懇の代表委員にしては心許ない会員であったと思います。その結果として、この一年は試行錯誤の連続の一年となり、常任委員会のメンバーを中心に、手探りで、一步一步、前に進んだ一年でした。今年度の常任委員会が、どんな議論をして、何を考えていたのかを会員の皆さんに伝えることで、今年度の活動の総括としたいと思います。

原点に戻ろう

代表委員に就任した時に特技懇誌の巻頭言で申し上げたように、特技懇のような組織にとって活動しにくい時代になってきました。特技懇は趣味の集まりのような全くの任意団体ではありません。特技懇は職場の大多数の仲間が参加し、その存在が幅広く認められている長い歴史を持った組織なのです。しかし、その一方で、どのような活動を行うべきなのかが比較的曖昧な組織でもあるのです。このような組織にとって、現在は本当に活動しにくい時代であると思います。特技懇は、何かを要求していくことで目標の実現に向けて活動していく組織であるべきなのか、それとも会員相互の懇親をより深めていくことを目的とするべきなのか。さらには、昨今のワーク・ライフバランスの変化の中で、職場内の組織として特技懇はどうあるべきなのか。現在は、会員にとって「特技懇とは何か」が一層わかりにくくなってきました。

代表委員としての最初の仕事にOB会員への挨拶回り

がありました。多くのOB会員からは、新年度の特技懇に対する期待を感じると共に、かつての質の高い合目的な活動をしていた頃の特技懇を懐かしむような思いも感じました。そんな細かい交ぜた気持ちのまま、新しく入庁された方に対する勧誘の場では、「特技懇は、懇親会を開催し、特技懇誌を発行するだけの会ではなく、皆さんにとっての何かがあります」と挨拶しました。

特技懇の会則には、特技懇の目的が明記されていますし、その目的を達成するために行う事業も列記されています。しかし、その目的と事業との具体的な繋がりを考えても、その中に「会員にとって特技懇とは何か」という問いに対する明確な答えを見つけ出すことはできませんでした。そもそも、私自身がこれまでの特技懇の活動に詳しくなかったわけではありませんし、また、活動の実態をよく知らなかったのですから、代表委員になったからといって、にわかに「何か」を見つけ出すことは容易なことではありませんでした。

そこで率直に原点に戻るべきだと考えました。原点に戻って、一つ一つの活動を見直していけば、きっと「何か」が見えてくるのではないかと考えました。

「会員のために、今、特技懇は何ができるのか」という視点で、特技懇の活動を見直すことを基本的なスタンスとしました。特技懇でなければできないこと、それこそが「会員にとっての何か」に繋がっていくのではないかと考えました。

秋田副代表

特技懇の日常業務を行っている常任委員会は若いメンバーで構成されています。私と常任委員とでは15年以上の年次の差がありますし、まして常任幹事とは25年近く年次が離れています。こうした若いメンバーの中に

あって、一緒に仕事をした経験があったのは秋田副代表でした。秋田副代表とは比較的年次が近いこともあり、何でも相談をし、私が脱線しそうなところを常に修正してもらい、一年間頼りっぱなしでした。

今年度の活動が新たなメンバーで正式に動き始める前から、秋田副代表とは特技懇の運営に関して話し合いました。その中で、秋田副代表が「渡辺さんや私がやったらだめですよ。」と言ったことがあります。秋田副代表のこの言葉は、あえて、回り道になっても年次の古い私たちが前面に出ないようにして、若い委員や幹事に自分で考えてもらい、自分で行動してもらおうという意味でした。このことは、私にとっての自戒の言葉となり、今年度の常任委員会での最も基本的な約束事の一つとなりました。秋田副代表には特技懇誌の編集委員長も兼ねてもらいましたが、今年度の特技懇誌の評判がよかったとすれば、それは彼の人柄によるところが大きかったのではないかと思っています。

代議員総会

代議員総会は、内部会員に対する手続的な面が強いため、やや形式的な対応として位置づけられていました。しかし、本来、代議員総会はこれから1年間の活動の基本方針を決める大切な会議ですから、今年度の活動について徹底的に議論をし、その議論の成果を盛り込んだ資料を作成して、会員に示すべきだと考えました。そして、今年度の活動を議論するに当たっては、その基本的なスタンスを「会員のために、今、特技懇は何ができるのか」という視点で活動を見直すということにしましたから、「これまでもやってきたのだから今年度もやろう」という考え方は採りませんでした。手間が掛かっても、これまでの活動について、その活動の意味を議論し、確認した上で、今年度やるべき活動を決め、その活動を自分達の言葉で資料に書き込むことを目指しました。

まず、今年度の具体的な活動について、どのようなテーマの下でどのようなツールを使って実施していくのか、という観点から議論を始めました。一年間を通した統一したテーマを持ちながら活動したいと思っていましたから、一年間を通して活動の幹となるような具体的なテーマを定めるところから議論を始めました。

そして、活動の幹となるようなテーマについて、常任委員会では「今、求められる審査官」と決めていましたが、

具体的な活動内容にまで議論が及んでいなかったことから、代議員総会の資料には「知的財産を巡る共通の課題」と書きました。活動に用いるツールについても、「様々なツールを活用」、「積極的かつ効果的な情報発信」、「広報活動」、「意見交換の場を提供」といったキーワードを代議員総会の資料に盛り込みました。常任委員会での議論を重ねた結果、この頃には、本年度の活動の全体像がおぼろげながらも見えてきて、一年間の活動イメージが醸成されてきました。そして、特技懇アワードのアイデアが若いメンバーの中から出てきたのもこの議論の過程でした。

今年度の大きな目標の一つに、ホームページを含めた電子媒体を特技懇活動に積極的に活用するということがありました。その端緒として、代議員総会資料の配布形態を見直し、これまでのように全会員に紙の資料を配付するのではなく、特技懇ホームページで資料を見てもらい、紙の資料は代議員総会に出席する代議員のために用意しました。さらに、常任委員会の議題表を常に特技懇のホームページに掲載することで、常任委員会の活動の透明性を高め、常任委員会の活動をできるだけ会員の身近なものにする努力を始めました。特技懇のホームページについてはまだまだ改善の余地があると思いますが、日常の活動を会員にできるだけ速やかに発信する機能としてだけではなく、会員と常任委員会との双方向の情報交換のツールとしての機能がさらに高まればよいと思っています。

懇親会

今年度の懇親会は、例年と外形的には何も変わりませんでした。特技懇最大のイベントである懇親会は、いつもの時期に、いつもの場所で、いつもの人が集い、いつもの雰囲気のまま開催されました。

特技懇最大のイベントであるだけに、懇親会の準備の大変さは想像以上でした。例えば、招待者についてだけでも、招待者の範囲を決め、連絡先と連絡方法を確認し、招待状を発送し、返信を確認し、名札を作製し、当日ご案内する、といった作業があります。そして、招待者のための準備以外にも、食事・飲み物の打合せ、司会進行、挨拶の手配、写真撮影・録音の準備など、その準備作業は多岐にわたり、まさに、実態は、手作りの懇親会なのです。そして、担当委員の指示の下に、常任委員会のメ



ンバーや編集委員会のメンバーのみならず昨年度のメンバーまでも動員して、準備することになりますから、まさに総掛かりの状況になります。

皆様のおかげで、今年度の懇親会は、来賓からのとっておきのご挨拶に懇親会が盛り上がり、新人のとてもしっかりした挨拶に皆さんが驚き、まるで同窓会のような和やか雰囲気でありました。最後の参加者がお帰りになり、会が無事に終了したときには、ホッとしました。

代表委員に就任した当初には、会員の参加者が思ったほど多くないことから、「一体、誰のための、何のための懇親会であるのか」について、考え込んだこともありました。特に、業務が忙しい中堅の会員の参加者が少ないことがとりわけ気に掛かっているところでしたから、中堅の会員の参加者を何とかして増やしたいと考え、常任委員会でも検討しました。そこで、今年度は、新人の指導審査官からは会費を頂かないという方針にしました。もともと中堅の会員の参加が少ないのは会費の負担だけが理由ではないと思っていましたから、今年度の方針により、どれだけの中堅の会員が参加して頂けたのかわかりませんが、今後とも様々な働きかけをすることで、中堅の会員から数多く参加してもらえるような状況になれば良いと思っています。

来年度は懇親会の場所が変わりますから、「いつもの場所」で開催することにはなりません。懇親会も時代の変化の中で、変わっていくことになります。来年度は、「いつも以上の人が集えば」と願っています。

特技懇ハンドブック

今年度の常任委員会で最も時間をかけて議論したトピックスは特技懇ハンドブックの発行についてでした。

特技懇ハンドブックに対する私の問題意識は明確でした。特技懇ハンドブックは2年ごとに発行していますが、最近ではその個人情報に関する項目について非掲載とする会員が増しているという実態があり、会員のハンドブックに対する意識が急速に変化しているように感じていました。さらに、一般的な傾向として、個人情報の保護の観点から、住所や電話番号などの個人情報を掲載した住所録的な機能を備えた名簿が私の周囲からどんどん姿を消していっていました。このような状況の下で、どのような内容の特技懇ハンドブックをどのような形態で

会員に届けば、本当に「会員のためになるのか」という観点から議論を重ねました。

「そもそも、特技懇ハンドブックは会員にとって何のためにあるのだろう」とその存在意義を問うてみたり、「紙媒体による発行をやめてウェブ版だけにしよう」といった極端な提案を持ちかけては議論しましたが、私以外の常任委員会のメンバーは存外に慎重で、保守的でありました。そして、常任委員会として、従来どおりに特技懇ハンドブックの紙媒体での発行を決め、掲載項目の見直し案を作成した時点で、会員に広く意見を聞いてみることにしました。

会員からは多数のコメントや新たな提案を頂きましたが、見直し案に対してはおおむね支持が得られたと感じました。しかし、会員からのコメントが、そもそも特技懇ハンドブックは何のためにあるのか、何のために必要なのかといった根本的な議論にまで発展しなかったのは、少し残念な気がしました。今、実際に特技懇ハンドブックという印刷物が手元にあるという現実から一旦離れて、特技懇ハンドブックの存在意義を考えることは難しく、どうしても「ないよりもあった方が便利ではないか」という意識が働いたのではないかと思います。

抜本的な見直しはできませんでしたが、個人情報に関連する項目を削除することで、多くの会員の特技懇ハンドブックに対する現在の要望には応えられたのではないかと考えています。世の中の変化と共に会員の意識も変化します。特技懇ハンドブックの内容についても、アンテナを高くしつつ、今後も不断の見直しが必要であると感じています。

特技懇アワード

特技懇アワードは今年度全く新しく企画した活動でした。この企画が、常任委員会において今年度の具体的な活動内容を議論している中で、若いメンバーから出てきたアイデアであることは前に書いたとおりです。

特技懇アワードの真のねらいは「独り占めしない活動を支援する」ことにありました。執務環境を小さな工夫で改善する活動や、資料を勉強することにより知識レベルを上げるといった活動を独り占めせずに複数の人と共有することにより、周囲の執務環境も改善し、関係者全体の知識レベルも上がるといった活動に着目して表彰しようというのが、特技懇アワードの考え方です。そして、

特技懇アワードが一つのモチベーションとなって、会員の執務環境をより快適なものとしたり、知識レベルが一層向上するといった新たな大きな活動が起こることを期待したものです。

具体的に検討していく中で、代表委員として最も気に掛かったのは、表彰することはともかく、賞品を出すことについてでした。特技懇が行う活動において、賞品を出すことへの違和感がありましたが、最終的には賞品を出すことがこの企画にとってふさわしいものであり、しかも、この企画を成功に導くためには欠かせないものではないかと考え、賞品として図書カードを出すことに決めました。新しい企画ですから、問題点はそれだけではありませんでした。例えば、活動と業務との関係はどう整理するのかとか、本当に小さな工夫のようなツールを拾いきれるのかとか、一回限りの活動とするのかなど多くの問題が挙げられました。

最終的にやってみようかと決断したのは、仮に、この企画が特技懇の新たな展開として期待したほどの成果を上げなくても、この企画を通じての常任委員会と会員とのやりとりが、会員との距離を縮める努力の一環にはなるのではないかと考えたからでした。

実行してよかったとつくづく感じています。当初、関係者はいろいろな心配や不安があったと思いますが、結果的には質の高い活動がエントリーされましたし、投票して頂いた会員からもこの企画を支持するコメントが多く寄せられました。特技懇の最高顧問である特許技監には、お忙しい中、表彰式にご出席頂きました。受賞者は、特許技監から賞品を手渡されて、緊張しながらも誇らしげな様子でしたし、なにより、この活動の中心となった常任委員会の3人のメンバーがこの活動を進めていく過程で自信を付けて、自発的に問題を解決していくようになった様子を見るのは、私にとって実にうれしいことでした。

意見交換

意見交換は、とても地道な活動ですが、現在の特技懇の最も基本的な活動の一つであり、外部団体からの評価も高い活動です。この活動の特徴は、外部団体との活動であることとサブスタンスを取り扱っていることにあります。しかし、これまでの意見交換に関する活動については、こうした特徴を十分に活かしていただろうか

という印象がありましたから、今年度は、年度末にまとまった報告のできる活動にしたいという意識がありました。そこで、今年度はこれまでの意見交換のスキームも残しつつ、さらに「今、求められる審査官」というテーマを定め、一年間を通じて外部団体と共にこのテーマを追求していくスタイルを導入しました。

しかし、一つのテーマを定めて、追いつめていくスタイルを決めたからといって、思いつきのような議論を重ねていたのではこのスタイルを採る意味がありません。まず、確固たるデータに基づいて議論をすべきだと考えて、意見交換を始める前に、大規模なアンケートを実施しました。個人的にも、「今、求められる審査官」というテーマをふわふわした印象論による議論では済ませたくありませんでした。この活動の総括は別稿として掲載されていると思いますが、アンケートに裏付けられた事実に基づいた意見交換には重みがあったと思います。

今年度の意見交換の参加者には、例年とは違ったスタイルで検討をして頂き、ご苦勞をかけたと思います。意見交換のスタイルについてはまだまだ工夫の余地があると思っていますが、外部団体と実施しているのですから、キーワードは「共通のテーマをいかに選定するか」というところにあると考えています。

コア・メンバーと距離感

今年度は常任委員会から会員の皆さんに対して何度も問いかけや働きかけを行いました。具体的には、特技懇ハンドブックの掲載事項について、「今、求められる審査官」に関する大規模アンケート、特技懇アワードの推薦・投票などを通しての問いかけや働きかけでした。

興味深いことに、常任委員会からの問いかけや働きかけの内容は多様であっても、戻ってくるリアクションの数は、委員の選挙を除いて、ほぼ一定なのです。実際に数で表すと、約300名の会員からリアクションが戻ってきます。この数こそが、現在の特技懇の「コア・メンバー」の数、いわば、現在の特技懇の実力を示している数と考えて良いと思います。

この一年間、常に意識していたのは、常任委員会と会員との距離でした。秋田副代表の「渡辺さんや私がやったらだめですね。」という言葉は、そのまま「常任委員会がやったらだめですね。」に繋がると考えました。そして、常任委員会が会員から離れたところで活動に



ついてあれこれ考えるのではなく、会員との距離を常に意識しながら活動について考え、必要であれば問いかけや働きかけを行うことを基本にしました。こうした考え方が、常任委員会から部課室の幹事へと伝わり、部課室の幹事を通じてコア・メンバーを主とする会員の皆さんに届いたように思います。つまり、今年度は常任委員会と会員との距離が少し縮まったのではないかと感じています。

今後も、常任委員会と会員との距離をさらに縮めていく努力を続けて行くことで、コア・メンバーの数を増やして、特技懇の真の実力を高めていく必要があります。そのためには、会員に対してより積極的に働きかける努力を続け、会員一人一人との距離を縮めていくことが最も大切であろうと考えます。

さいごに

今年度は、「会員のために、特技懇は何ができるのか」といったフィルターを通して特技懇の活動を見直してきました。見直した結果として外形的には変化のなかった活動もありますし、見直しそのものが不十分であったため改善できなかった活動も多かったように思います。むしろ、変えることが必ずしもすべてよいわけではありませんが、さらに深く見直すことで、新しい方向性を示すことができた活動もあったのではないかと思います。結論として、「やり残したことはない」などとはとてもいえない心境です。

特技懇のホームページを通じた双方向の情報のやりとりや、関係団体との共同企画などやり残したことがいくつもあります。そもそも、特技懇の活動の根幹となる活動とはどのような活動であるべきなのかについての議論が十分ではなかったと猛省しています。特技懇の活動の中心に据えるべき活動を議論するためにも、さらにコア・メンバーを増やし、積極的な意見交換を続けることで、会員の意識をしっかりとグリップしながら運営していくことが求められていると考えています。

先輩・後輩、多くの方々からの励ましが大きな支えになりました。様々な働きかけに対して、快く応じてくださったコア・メンバーを中心とした会員の皆さんに感謝しております。そして、アクセルばかり踏みがちな代表委員に時としてブレーキをかけてくれ、一年間運営に携わった常任委員会のメンバーには、紙面を借りて感謝の

意を表することでその苦勞に報いたいと思います。

特技懇にはまだまだ大きな可能性があると感じています。そして、その可能性をどのように現実のものにしていくのかはひとえに会員一人一人の意識にあると思います。そうした意識を最大限に引き出す努力を常任委員会が今後も続けていくことを願っております。